

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	他者と共に運動する際の錯覚的な運動主体の帰属
Title(English)	
著者(和文)	野村修
Author(English)	Osamu Nomura
出典(和文)	学位:博士(理学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第11361号, 授与年月日:2020年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:三宅 美博,出口 弘,小野 功,瀧ノ上 正浩,長谷川 晶一
Citation(English)	Degree:Doctor (Science), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第11361号, Conferred date:2020/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	野村 修	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 三宅 美博	教授	長谷川 晶一	准教授
	出口 弘	教授		
	小野 功	准教授		
	瀧ノ上 正浩	准教授		

本研究は、他者の運動が自己の運動の感覚に生じさせる錯覚、およびその生起条件を実験心理学の手法を用いて明らかにしたものであり、「他者と共に運動する際の錯覚的な運動主体の帰属」と題して7章より構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景、目的および方針を示している。まず研究の背景として、運動主体感と運動主体の帰属に関して詳細に説明している。続いて、研究目的として以下の4つの問いを提示している。①継続運動における運動主体感は、知覚情報の遅延に対して単発運動と同様の性質を示すか。①自己の継続運動と同様の運動を実行する他者を観察する場合、自己が真の運動主体であるという事前知識に基づいて、自己に運動主体を帰属させるか、もしくは、他者に対して運動主体を帰属させるか。②他者に対して運動主体を帰属させる場合、自己に対する運動主体の帰属と他者に対する運動主体の帰属は排他的に生じるか、あるいは同時に生じるのか。③自己の継続運動と同様の運動を実行する他者を観察する場合の運動主体の帰属は、自己だけが運動する際の自己に対する運動主体の帰属と、他者だけが運動する際の他者に対する運動主体の帰属の重ね合わせとして生じたものか。これらの問いに対して答えを得るべく、実験課題の設定について説明している。

第2章「予備実験：継続的な運動における運動主体感」では、予備実験について詳細に説明をしている。ここでは継続運動としてのマウスの往復運動によってモニタ画面上のカーソルを操作するタスクを設定している。試行ごとに、運動主体感に関する質問に対して実験参加者に回答してもらい、知覚情報の遅延の運動主体感に対する影響を評価している。結果として目的①に対しては、タイムラグが増加するに従って、運動主体感を喪失する比率が増加することが観察されたと述べている。

第3章「実験方法」では、目的①～③に対応する実験について方法を詳細に説明している。ここではパートナー(他者)が実験参加者(自己)と同様にマウスの往復運動を実行するタスクを設定している。さらに対照実験として、参加者(自己)だけがマウスの往復運動を実行する場合と、パートナー(他者)だけがマウスの往復運動を実行する場合も設定している。マウスとカーソルの運動の間には、予備実験と同様にタイムラグを付与することで知覚情報の遅延を実現している。また、試行ごとに実験参加者に運動主体感の帰属に関する質問に回答してもらい、知覚情報の遅延の運動主体の帰属に対する影響を、それぞれの条件間で比較し評価するとしている。

第4章「実験結果」では、実験結果について詳細に説明している。まず、それぞれのタイムラグにおける実験参加者の回答比率を算出している。さらに、実験参加者が「自己がカーソルを制御しているとは感じなかった」比率を算出し、前記比率よりそれぞれの条件における自己に対する運動主体の帰属を比較している。また、実験参加者が「他者(パートナー)がカーソルを制御しているとは感じなかった」比率を算出し、前記比率よりそれぞれの条件における他者に対する運動主体の帰属を比較している。

第5章「考察」では、実験結果に基づいて考察を行っている。実験参加者は自己が真の運動主体であると知っているにも関わらず、自己と同様の運動を行う他者に対して運動主体感を帰属させ得ることを考察している。他者がカーソルを制御しているという感覚は事実と反しており、本感覚を先行研究における運動主体の他者への帰属と対比して、「錯覚的な運動主体の他者への帰属」と名付けている。さらに、錯覚的な運動主体の他者への帰属は、運動主体の自己への帰属と同時に生じることを考察している。最後に、自己および他者への運動主体の帰属は、運動主体の自己への帰属と運動主体の他者への帰属の単なる重ね合わせではないことを考察している。

第6章「結論」では、実験結果と考察を総括し本研究で得られた成果をまとめている。

第7章「展望」では、上記の結論に基づき、今後検討すべき課題として4つの項目を示している。

以上を要するに本論文は、他者の運動が自己の運動の感覚に生じさせる錯覚およびその生起条件を明らかにしたものであり、理学的貢献するところが極めて大きい。よって、本論文は、博士(理学)の学位論文として十分価値があるものと認められる。